

北野天満宮瑞饋祭についての一考察

——宗教儀礼の展開を中心に——

吉 野 亨

一 本稿の目的

本稿では、北野天満宮瑞饋祭について、瑞饋祭の展開―瑞饋神輿の成立―と、祀り手とされてる西京神人の近世期における展開―「神職化」―との関係について、『北野天満宮史料』に表れる西京神人の祭礼形式と瑞饋祭の形式を比較するとともに、近世における神人等の動向を考証することで関係性を明らかにしてゆく。

二 瑞饋祭と西京神人

現在の瑞饋祭は芋茎で屋根を葺き、野菜・草花で飾り立てた瑞饋神輿が西ノ京周辺を練り歩く祭りである。この祭りは、北野天満宮に属した西京神人が行っていた私祭で『北野誌』によれば北野天満宮創建以前から行われていたという由緒を持つ。本来は新穀蔬菜を奉る豊穰の祭りであったが、神饌が次第に華美になり、慶長の頃には神輿型に新鮮で用いる新穀蔬菜を用いる現在の瑞饋神輿の原型ができたと言われる。

祀り手である西京神人とは、『北野誌』によると北野天満宮に属する神人で、西京（現在の左京区西ノ京周辺）に居を構え、七つの神供所に分かれて神供調進・祭礼供奉・雑役負担等を神役として勤めた人々を言う。一側面として、麴座神人とし

ても著名であり小野晃嗣・網野義彦らによる研究で経済的特質が論じられている。近年では三枝暁子「神人」によって近世期の『北野天満宮史料』から私祭を行う神人に着目し、神人の「神職化」が指摘されており、このような「神職化」が西京神人の存続を保証したのではないかと論じられている。

三 近世期における展開―瑞饋祭と西京神人の関係性―

考察の結論として、瑞饋祭の展開は、近世期における西京神人の展開―神人存続のための画策―と関係するものであった。西京神人は神供調進・祭礼供奉などの勤める人々であったが、各保に寺院を持ち独自に寺院運営をおこなう祭祀者でもあった。その神人達が、文安の麴騒動を切っ掛けに存続の危機に直面した後に、北野社とは関係なく「御旅所」において祭礼を「わたす」という行動が記録に表れるようになる。これらは三枝が指摘する「神職化」の最たるものであるが、「神職化」は祭りが勃興したことを仮定した上での指摘である故、寺院運営をしていた西京神人にとっては祭りをを行うことは祭祀者として必然であったと考えられる。それが神人存続に際して、祭祀者としての側面を強く打ち出すことで、北野社に属する祭祀者としての新たな位置付けを得るという付加価値のもと祭礼がおこなわれていたと言える。

故に瑞饋祭は近世期の西京神人の展開に伴う形で、新たな展開を見せることになるのである。